

事業報告書 (平成30年度)

事業名 流域住民対話型総合企画『森・川・海の生き物たちのつながりを考える』

団体名 旭川源流大学実行委員会

担当者名 吉鷹一郎

※活動の様子がわかる写真(データもお願いします)と説明を必ず添付してください。

1. 活動内容(日時、場所、参加対象者、人数、内容等)

今年度の活動のスタイルとして、旭川の流域の自然環境を住民自らの手で、①調べる②その結果を流域住民に伝える③課題について一緒に考えるという問題解決方式で行ってきた。ESDの視点の一つである「持続可能な良好な自然環境の保全と創出を検討できるように取り組んで行くことにした。以下に、取り組み内容を示した。

まず、①「調べる」では、4月～11月まで毎週1回以上の水生昆虫調査(延30人)と毎月1回の水生昆虫同定会(5～10名)を実施。4月30日笠岡諸島大飛島・真鍋島での海岸ベントス状況視察(12人)、6月9～10日第9回旭川源流大学(蒜山地域、一般・高校生・大学生20人)、7月22日旭川かいぼり調査協力参加(勝山、90人、主催 真庭市・旭川流域ネットワーク)、8月5日河川生態学の可児藤吉博士墓参(勝央町勝間田、10人)、9月～10月大城カゲロウ羽化調査(延90人)、10月20日大野川生物調査(50人)、11月4日第4回旭川かいぼり調査に協力参加(岡山市建部町竹枝、580人、主催 旭川かいぼり調査実行委員会)。次に、②「伝える」では、2月25日富文化祭にてオオサンショウウオ研究パネル展示(鏡野町富、200人、説明は地元出身大学生が担当)、4月15日牧石文化祭にてパネル展示(牧石小学校、200人)、5月5日鏡野町富の「お田植祭り」においてオオサンショウウオ生体展示と調査(約200人)、5月19日牟佐文化祭にてパネル展示(岡山市北公民館牟佐分館、200人)、6月2～30日鏡野町図書館にて「森・川・海の生き物展～つながりを考える」パネル展示(鏡野町ペスタロッジ館、50人、鏡野有線テレビ局編集特番を放送)、7月11～24日「森・川・海の生き物展～つながりを考える」パネル展示(岡山ふれあいセンター2階、100人)、9月24日「旭川流域の哺乳類」実物7種展示(操山公園里山センター、50人)、11月4日第11回旭川かいぼり調査にてパネル展示解説(岡山市竹枝小学校前河川敷、580人)、11月9～11日第42回水生昆虫研究会岡山大会にて可児藤吉博士紹介パネル展示及び旭川水生昆虫調査の研究発表(会場:真庭市津黒高原荘、85人、現地事務局を担当)、1月14日総会記念講演「旭川を美しく再生するために私たちができること」(操山公園里山センター多目的室、講師:大阪府立大学名誉教授谷田一三博士、30人)。

最後に、③「考える」では、1月28日大阪市立自然史博物館見学研修、7月20日朝日漁協組合長さんとの懇談、7月27日高県境理科部会の白石島研修に参加、8月9日第3回及び川に関わる環境学習を学ぶ集い(岡山市環境学習センター「めだかの学校」、20人、講師:岡山理科大学准教授斎藤達昭博士、テーマ「森・川・海の生き物の繋がりを考える」及び「7月西日本豪雨災害を検証する」)、12月16日第4回川に関わる環境学習を学ぶ集い(岡山市

環境学習センター「めだかの学校」、20人、テーマ:「これからの10年の活動を展望する」。



大阪市自然史博物館見学



大飛島海岸ベントス視察



大野川生き物調査



富オオサンショウウオ展示



第9回旭川源流大学新庄



第3回川に関する環境学習を学ぶ集い



勝央町可児藤吉博士墓参



第11回旭川かいぼり調査



第42回水生昆虫研究会岡山大会

2. ESDの視点を取り入れたところ、ESDの視点で見直したところ

1にも述べたことを繰り返して恐縮ですが、今年度の活動のスタイルとして、旭川の流域の自然環境を住民自らの手で、①調べる②その結果を流域住民に伝える③課題について一緒に考えるという問題解決方式で行ってきた。ESDの視点の一つである「持続可能な良好な自然環境の保全と創出を検討できるように見直して取り組んで行くことにした。

この方式を取り入れることで、ESDの課題の一角である環境教育の分野で、次世代の若者と旭川流域の人々との交流を通じて、観察による感動と共に、地元の人々との共感することの感動から自らの地域に対する将来の乗り越えるべき課題を見つけて学ぶことができ、さらに解決の方策を見出すことにつながる貴重な経験を得る可能性があると考えている。

3. 取組の成果（参加者にどのような意識や行動の教育上の成果があったか。感想など）

「調べる」点では、旭川流域の生物調査を行うことで、水生昆虫・サンショウウオ・淡水魚などお生息状況の知見を多く得ることができた。参加した高校生・大学生・社会人の河川生態の多様性保全の重要性の学びと研究意欲の向上において寄与することができた。

「伝える」点では、流域の公民館などでの巡回パネル展示（富・牧石・牟佐・鏡野・里山センター・岡山ふれあいセンターの6か所プラス各調査会場）及び、第42回水生昆虫研究会岡山大会（現地事務局を担当）では、自らのこれまでの活動を振り返って学びなおすことができた。さらに、水生昆虫研究会岡山大会では専門研究者に交じって、地元高校生の発表が初めて行われたことは、特筆されることと思われる。

「考える」点では、8月と12月の2回行われた「川に関わる環境学習を学ぶ集い」（通算4回）のシンポジウムにより、経験交流による学び直しと今後に対する課題の発見と乗り越える展望を見つける契機となっている。

4. 今後の課題と展望

「調べる」「伝える」「考える」という3点の視点で意識的に取り組むことにより、これまでの活動に新たな視点を与えることができた。「調べる」の点では、旭川の生物相のさらなる解明と2018年7月豪雨災害による河川生態への影響と回復経過を調査するという課題が浮かび上がった。「伝える」では、流域の住民の河川生態への関心を深める現実的な資料として、「水生昆虫パンフレット」の作成が課題として浮かんできた。「考える」点では、これまでの県内の自然史研究の先覚者（可児藤吉・川村多実二など）の足跡に光をあてられていない状況から、流域住民にも分かり易く現代の時点から捉えなおすという課題も持ち上がった。これらの課題を乗り越えた地平を展望することで、「持続可能な河川生態の多様性の重要さ」を考える上で、元々に持っていた流域の住民常識がさらに豊かになることを確信している。